

フランスの革命運動 一八一五—七二(七)—

ジョン・プラムナツツ
高村 忠 成 (訳)

第七章 フランス共和国 (一)

第一節 第三共和政の誕生

87

一八一五年、フランスには共和派はほとんどいなかった。だが、一八七〇年には、共和政こそが、フランス人を最も分裂させることのない“体制”になっていた。一八七一年にフランスは内乱に陥ったが、共和政はフランス人の分裂を最小限にいとめた。共和派がこの内乱を戦い、共和政がその内乱を乗り越えて生きのびることができたということこそが、共和派に力があつたということを示す何よりの証拠ではなからうか。なお、私がここでいう共和政とは、たんに君主がいらないということだけではなく、自由民主政であることを意味する。一八七〇年以降のフランス以上に、自由ということをよく知っている国がこの世界にあるだろうか。フランス以上に民主的な国はどこにあるだろうか。

(1) 第三共和政への評価

第三共和政が誕生する時、特殊な状況であったため、同共和政に対しては、表面的な評価しかなされなかった。人々はしばしば、フランスは共和政になった、というのは、フランスは、何か他の体制になる決意ができなかったからだ、という。その人たちは、まるで「共和政がフランスを最も分裂させない」とのティエールの意見が決定的なものであり、一般受けするかのように話す。また、あたかもフランスが、他によりよい政治体制がなかったため、いやいやながら共和政を受け入れたかのように語る。はては、あたかもフランスは、決して実際には望まなかったものに、最終的に身を投じたかのようにも言う。

フランスは、第三共和政の初期の頃、疲弊していた。すなわち、対外戦争に敗け、ヨーロッパでのフランスの優位は失われていた。また、内乱を戦い、それが終わった時には、安堵したり恥しく思ったり怒りを感じたりした。しかし熱狂さはなかった。フランスは疲れており、屈辱感に満ちていた。共和政の到来は、多くの人たちにとっては良いことのように思え、他の人たちにとっては必然的なことであった。しかし、それ以外の人々には、何か悪いことが起こる予兆であるかのように思えたかもしれない。だが、共和政の到来は、大歓迎されたわけでもなければ、大きな反対にあったわけでもなかった。共和政は、半占領状態にあるフランスに現われた。その時の様子は、まるである訪問者が、何人かの人には長い間温かく待ちのぞまれていたが、他の人には恐れられていた、ある家を訪れた時のようであった。その家は、突然の悲しみに打ちひしがれており、そのために訪問者が訪ねた時は、彼に気づく人はいなかった。訪問者は、歓迎されるか嫌われるか、と思っていた家で、自分には全く関心が払われていないことに気づくのである。

三番目の共和政が樹立された時、フランスは戦争中であった。しかも、その戦争は勝てるかも知れないという期待に満ちていた。体制の変更はすぐに受け入れられた。だが、だれもその変更の重要性をあえて厳格に計算するような

ことはしなかった。すなわち、新政府は旧政府よりも、もっと効果的に戦争を遂行してくれるだろう、ということだけが期待されたのである。地方の人たちは、戦争がその損失を回復できないほど決定的な敗北をきしたということを知った時、共和派の好戦的な態度に怒りを覚た。地方の人たちは、熱狂者ではなく、パリ市民よりも早く敗北に気づき、市民たちほど落胆していなかったからである。

地方の人たちは、新共和国の最初の議会選挙では王党派に投票した。というのは、王党派は地方の人たちに平和を約束したからである。また当時、唯一の重要な争点は、戦争の継続か、早期終結かであった。これらの選挙が行なわれた時、フランスはすでに共和国であった。候補者には国王はいなかった。候補者は、自ら名乗りをあげればよかった。候補者の多くは、平和の創出を唱え、王党派を名乗った。彼らを選出されたのは、平和を生み出すためであった。平和を取り戻すと、彼らは祖国の政治の未来を決定する仕事に取りかかった。そして、祖国に国王をすえようと試みたのである。しかし、フランス人の大多数が国王を望むということは、殆んどありえなかった。彼らは、十九世紀のどの国王よりも、彼らの間で人気があった皇帝を失ったばかりだったからである。

すでに明らかのように、フランス人は、コミューンに反対してヴェルサイユ議会を支持した。すなわち、フランス人は、自治を求めるパリの要求を拒否したのである。それは丁度、パリが戦争の継続を望んだが、フランス人はそれを拒絶したのと同じであった。だが、パリに対する勝利の責任を負っていたのは、王党派の議会よりも、ティエールとその閣僚たちであった。その勝利は、いつも条件つきとはいえ、パリに対するフランスの勝利、もしくは、プロレタリアートに対するブルジョアと農民の勝利、ないしは、コミューンに対するヴェルサイユの勝利と言うことができずともかもしれない。それは、決して共和政に対する王党派の勝利とは言えないのである。その勝利は王党派を助けるようなことはしなかった。なぜならば、その勝利は、共和政に不信を懐いていなかったからである。いなそれどころか、その勝利によって、共和政は強化された。というのは、その勝利はあまりにも完璧であったため、地方の人々は、パ

りの急進派や革命家を恐れる必要はもはや全くないと感じたからである。共和政は潰瘍を取り除き、身体を清めたのである。

(2) 望まれた共和政か

フランス人の大多数が、一八七〇年九月以後と一八七一年に、共和政を望んでいたかどうかはだれにもわからない。多くのフランス人には、それよりもっと早く解決しなければならぬ問題があった。われわれは、フランスにおいて、共和政に対して絶対賛成の人が多かったのか、あるいは反対の人が多かったのか詮索する必要はない。もし王党派がすばやく行動していれば、フランスに国王をすえることはできたかもしれないし、また、フランスも最終的にはその国王になじんだかもしれない。しかし、もし国王が即位したとしても、彼は、議会民主制は受け入れなくてはならなかったであろう。新国王は、ナポレオン三世が彼の統治の晩年に、共和派に行なったのと少なくとも同じ位の譲歩を、共和派にしなければならなかったであろう。フランスが一八一五年から一八四八年までの間に経験したような王政を復活させることは、一八七〇年代にはもはや不可能であったと言ってよいであろう。

私は、この点こそが、ティエールの言った、「共和政こそがフランス人を最も分裂させないものである」との至言を、どのように解釈すべきかという時の鍵になる、と思う。たとえわれわれが、その言葉を真実として受けとめたとしても、われわれはそこから、おそらくティエールが言おうとしたこと以上の意味をくみとらなくてはならないだろう。共和政は、フランス人の気分を損ねない体制というわけではなかった。というのは、実際それは、多くのフランス人によって憎まれていたからである。別の言い方をすると、共和政はフランスの多くが、熱狂的に望んだ体制ではなかった。しかし、より多くのフランス人が、他の制度よりは共和政を欲し、共和政への人々の忠誠は、ただ広くからというだけではなく深くもあったのである。

共和主義は、すでにフランスでは最も強力な政治的勢力となっていた。他派が共和派に譲歩しなくてはならなくても、共和派は他派に対して少しだけ譲歩すればよかった。われわれは次のように断言できる。たとえ王党派が団結したとしても、もし王党派が名称を除いて共和政のすべてのものをよるこんでうけ入れなければ、すなわち、もし王党派が、共和派が長い間、戦い求めてきたものによるこんで譲歩しなければ、王党派の国王を戴くことはできない、と。すべての共和派が求めてきたものは、ついに、一八七〇年に達成された。換言すれば、達成されなかったものがあるとするれば、それは、すべての共和派が要求してこなかったからである、ということになる。

フランスは、ほとんど偶然共和政になった、一八七〇年に打ち立てられた体制は暫定的なものであり、代替物がなかったので続いたにすぎない、という考え方は、そこにいくら注釈がつけ加えられようとも、明らかに間違っている。多くのフランス人が一八一五年にはルイ一八世を、一八三〇年にはオルレアン公を望んだのであるが、一八七〇年には、それらよりもはるかに多くのフランス人が、共和政を望んだのである。しかもフランス人の共和政への願望は、一八五一年のルイ・ナポレオンの独裁制へのそれよりも、はるかに強いものであった。共和政は、「やむをえない手段」ではなかったし、人々が平和のためとか、無関心から屈服したようなものでもなかった。

共和政とは、多くのフランス人にとっては信念の問題であり、長年渴仰してきたひとつのシステムであった。というのも、彼らにとってそれは、自由、民主主義そして、あらゆる形態の特権から貧しい人々を保護するものとの意味があったからである。一八七〇年九月以後、何年間かにわたって、人民投票という点では、共和政への票数は、ナポレオン三世が彼の統治期間中に集めた票数よりも少なかったかもしれない。しかし、その票にはナポレオン三世の票よりもはるかに重みがあり、その票は、人々の共和政への深い確信と強い忠誠心を表わしていた。

逆境は共和派を団結させなかったし、たがいに友人にはしなかった。むしろ共和派を試した。逆境によって共和派は、政治的に最も戦闘的となり、はっきりと意見を表明するようになった。そして、フランスの中でも、最も意志強

固な存在となったのである。

ボナパルト主義には、熱烈な信奉者がいた。だがその思想は、全体として、信念なき人々の、政治に無関心で責任を恐れる人々の、そして、ただ秩序ある政治と国家の栄光だけを求める積極的な理念なき人々の、信条であった。正統王党派とオルレアン派は、極めて小さな少数派でしかなかった。彼らは裕富であり、社会的な威信も高かったが、人気がなかった。たしかに彼らのうち何人かは、それぞれ自分の地域ではかなりの信奉者をもっていた。しかし、彼らをいっしょにしたとしても、フランス人を引きつけるような働きはしなかった。

セダンでナポレオン三世が捕虜になった後でさえも、大部分のフランス人の目には、ボナパルト家は、ブルボン家よりもはるかに栄光ある王朝として映った。というのも、ブルボン家をフランスから追い出すには、パリでの数日間の暴動で十分であったが、ボナパルト家を追放するには戦争における敗北を必要としたからである。ボナパルト家の権威が終わったとはいえ、強力な外国の敵と戦っただけに、その王朝は栄光あるものとして人々の眼に映ったのである。

ブルボン家が統治していた一八一五年から一八四八年までの間、フランス人の大多数は、まだ政治に無関心であった。しかしその時以降、かなりの国民が政治に引き込まれていった。そのうえ、旧王朝の一方または他方に忠誠を尽す階級は、一八一五年から四八年にいたる以前にくらべると、はるかに少なくなった。もし王党派のやり方が上手で、目的も一致していたならば、王制の復活は可能だったかもしれない。

しかし、一八七〇年以後のフランスは、王党派の失策から生まれた創造物というよりも、やはり共和派が作成したものであったといえる。もし王党派が手ごわい存在であったとするならば、それは彼らの王党派主義に人気があったからではなく、王党派が議会を支配し、軍隊と教会に友人をもっていたからである。ボナパルティズムは、軍事的敗北によって評判を落したので、また、シャルル十世かまたはルイ・フィリップよりもナポレオン三世の方を懐しむ人た

ちが沈黙していたので、政府当局の自然な友人たちや教会や軍隊の高位にある人たちは、共和政よりもブルボン王朝を復活させた方がよいのではないかと考えた。彼らは、安定、秩序そして自分たちの利益を守る政府を望んだのである。

(3) 反共和主義史観

共和政に敵意を懐いている歴史家たちは、一八七〇年五月に行なわれた第二帝政の最後の人民投票では、七三〇万人の人々はその体制を支持し、反対はただの一五〇万票に過ぎなかったと主張している。パリにおいてさえ、皇帝に敵対しているのは、やっと過半数を越えただけである。第二帝政は、その崩壊の四カ月前でさえまだ人気があったのだ。帝政が崩壊した時、政権を握り、フランスを統治する有力な党派がなかったため、共和派がそれを行った。そしてその後、当初は王党派がだれを国王にすえるかで意見が一致しなかったため、後に、やっと王党派が意見の一致をみたが、フランスに戻るべき国王に唯一受諾可能な条件を受け入れさせることができなかったため、結局共和政が存続することになったのである。

反共和的な歴史家たちの説明によると、パリの共和派たちの行動は、非合法的（だれもそれは否定できない）であったのみならず、一八七〇年九月四日の悪しき民主派のような行動であった。すなわち、共和派たちは、ほんの十六カ月前に円滑に選ばれた機関である立法府の意見を無視して共和政を宣言したのである。共和政は最初、フランスに押しつけられた。次に、それは後になってフランスに定着していった。というのも、フランスから共和政を除去したいと思っていた王党派の人々が団結しなかったからである。また、フランスの人々が少しずつ戦うことに疲れ、少数派によって多数の人々に押し付けられた共和政を受け入れていったからである。

「共和政がフランス人を最も分裂させないものである」とのティエールの表面的な判断を、あたかも、共和政が中

立て害のないものであり、興奮している人々の神経を鎮静化させるあまり切れのよくない妥協策であるかのようにもっともらしくさせているのは、こうした説明やその説明が根拠としている証拠なのである。それゆえ、われわれはこの証拠のいくつかを検証してみよう。

(4) 自由帝政のもつ意味

帝政の最後の人民投票は、その体制に反対よりも六倍もの賛成票を与えた。しかし、その時まで帝政はすでに自由帝政になっていた。帝政は、共和派の大多数が要望するかなりのものを、共和派に譲歩したのである。これらの譲歩は、共和派に対してなされた。すなわち、これらの譲歩は、皇帝が共和派の支持をえるためか、もしくは、共和派の敵意を和らげるために支払った代価だったのである。

王党派もまた、もっと自由な体制を望んだ。専制政府のもとでは、自分たちももてなかつた機会を、自分たちに与えてくれるような体制を欲したのである。このことは、王党派も、普通選挙制はすでに定着している、ということを手学んだことになる。

帝政を自由主義的なものにすることによって、ナポレオン三世は、すべて彼の政敵の意になつたことは、行なわざるをえなくなった。しかし、彼が実際に懐柔しようとした人たちは、また、もし彼の王朝が生きのびるために彼がどうしても手にしなければならぬ寛容性（たとえ現在以上のものでないにせよ）のもち主は、共和派であった。共和派は、ナポレオン三世にとって、彼が一八四八年十二月に大統領に選ばれてから、彼が自分の権力を絶対的なものとする一八五一年十二月に至るまでの間、彼の最も手ごわい敵だったのである。

一八六九年五月に行なわれた第二帝政の最後の議会選挙で、官選候補への賛成票は四五〇万票であったが、反対票がじつに三三〇万票にもなった。この選挙は、一年後に行なわれた人民投票と同様に、大変重要なものであった。

反対票の大多数は、共和派に投じられた。その票は、権威主義的な政府に対する反対票であり、民主制と人民の自由のために投じられた票であった。また共和派が、しかも同派だけが、五〇年以上にわたって一貫して戦い求めてきたものに対する票であった。そして一年後、一五〇万人の人々が皇帝に反対票を投じたが、その時皇帝は、共和派に対して自分に従って欲しいとの思いを込めて、できる限りの譲歩をしたのである。

これら一五〇万人の人々は、体制と絶対に妥協しない敵対者であった。彼らは、体制が自由主義的になったからでなく、クーデターを起こす前の三年間、自由を破壊するために策動し、今になってやっとその自由をフランスにとりもどそうとしている。十二月の男を信用できなかったから、その体制に反対票を投じたのであった。よって、一八七〇年五月に、賛成と投じた七三〇万人の人々は、もちろん、帝政の支持者であったわけではない。すなわち、彼らの多くは、十二カ月前、官選候補に反対票を投じ、大部分が共和派に投票したのである。一八七〇年五月に、賛成と投票したことによって、彼らは疑いもなく、皇帝の譲歩を受け入れることを表明した。皇帝は譲歩し、人々はその王朝を承認したのである。しかし、人々がそのような行動をとった時、その王朝が崩壊するとはだれも疑わなかった。

フランスは、母国に自由主義的な民主主義体制をもたらした皇帝をいただくことになった。皇帝に賛成投票することなしに、体制だけに賛成することは不可能であった。それは、ちょうど、皇帝の体制に賛成することなく、皇帝だけに賛成投票することが不可能なのと同じである。人民投票の性質とはこのようなものである。贈与者たる皇帝がいて、彼の贈与物である自由帝政があった。とすると、フランス人は、それら両方に対して賛成か反対かを表明しなくてはならなかったのである。

私は、一八六九年五月に政府に反対投票をし、一八七〇年五月に自由帝政に賛成投票をした人々が、皇帝からの贈与物を受け入れたにもかかわらず、皇帝から逃れることを望んだということ、また、その人々は皇帝は嫌ったが、皇

帝の授与した自由帝政は好んだので、人民投票では「賛成」に投じたということ、をのべるつもりはない。その人々のうち多くが、皇帝の譲歩によって王朝と和解したことは間違いない。また、疑いなく一八六九年五月に、ナポレオン三世の政府に反対投票した他の人々も、決して共和政を望んだのではなかったのである。

しかし、こうした人々は共和派が求めていたものよりも、もっと多くのことを望み、また、当局が一八六九年に選挙民にまだかけることのできたかなりの圧力に抵抗するために、共和政をもちだした。共和政は強力な少数派から強く要望されていた。その少数派は、体制に反対するどの派よりも強かった。そして、共和派が提唱していた民主主義、自由、（かなり漠然としたものであったが）社会改革というものは、その少数派によってすでに大々的に要求されており、それだけに少数派とはいえ、彼らの要求にさからって、フランスを統治することは、もはや不可能になっていた。

私は、これらの要求は、一八六九年の選挙と一八七〇年の人民投票から引き出される合理的な結論である、と思う。自由帝政は、生き残るための絶好の機会をえた。もっとも、その政府の愚かさ、ビスマルクの巧みな狡猾さによって、破壊されてしまったが。自由帝政は、第一帝政の終焉以来、フランスがそれまでにしいた体制の中で、最も人気のあるものであったことは確かである。しかし、だからと言って、第三共和政が誕生した時、その共和政は（たしかに全く異なったものとはいえず）人気がなかったとは、一口には言えない。それは、帝政よりも決して冷めてはいない、より熱狂的な共鳴者をもっていた。もっとも、帝政と同じ位の数の激しい敵もいたけれども。

もし当時、共和政がフランス国民を最も分裂させないものであるとするならば、それは、フランス国民が共和政に無関心であったからというわけではないことは確かである。それは、今やボナパルト派が地位を失い、それに匹敵するほどの人気のある、かわりうる体制が他になかったからである。また、共和派がこれまで以上に強力になり、かつ強気になったからである。共和政が一時的なものであり、予期しないものであるということは、議会で優位を占めていた王党派にとっては、じつに有利なことであった。すなわち、もし王党派が、すぐにフランスに議会主義的な民主

的王制をもたらさなかったならば、彼らはフランスに全く何らかの形をした王国をもたらすことはできなくなるということを意味した。短期間ではあったが、王党派はわずかな可能性を手にしていった。しかし、彼らは、その実現に失敗したのである。

第二節 第三共和政と共和派

(1) 共和派の台頭

一八七〇年代初期の共和派の力を過小評価する歴史家たちは、二つのことを忘れている。一つは、帝政に反対する野党の性格であり、もう一つは、第二共和政の歴史である。

シャルル十世とルイ・フィリップは、ナポレオン三世が彼の統治の晩年に受けたような攻撃に耐える必要はなかった。すなわち、共和派の数はそれほど多くはなかったし、自分たちの力を意識していなかった。自分たちの敵を見下すこともなかった。また、パリは以前には、フランスの支配者になれなれしくするようなことは決してなかった。皇帝は彼の脆弱さを感じていた。すなわち彼の譲歩は、共和派の敵意が、彼の人民投票や議会の多数派が彼を安心させるよりも、はるかに彼を脅やかしている、というを裏付けた。彼は、共和国大統領の間に、権力への道をくわだて、かなりの危険を冒し、武力も行使した。しかし、彼の統治も末期になると、病氣や欲求不満のために神経質になり、決断力も鈍って弱体化していった。彼は本能的に強さを抑制するようになり、恐らく後に、また遅くないうちに自分の支配と王朝を倒すことになるであろう人々に対しても、寛容になっていった。彼は、七月王政の崩壊直前よりも、一八六〇年代になって、共和派がずっと強力になった、ということを知っていた。一八三〇年と一八四八年の革命は、憶病者に対する弱者の勝利であった。すなわち、それ以後、政治闘争は、規模が大きくなり、激しさを増していった。

のである。

その政治闘争を拡大させ激化させていったのが、共和派である。そして、共和派に好機を与えたのが第二共和政であった。二月革命は、多くのフランス人にとっては、全く寝耳に水であった。人々は、ギゾーと、彼の聡明だが退屈な国王に飽き飽きしていた。だが人々は、ギゾーや国王に暴力をもって反抗しようとは考えていなかった。

七月王政は、何人かの人にとっては有益であり、他の人に対しては見下す態度をとり、また、大部分の人には関心を払わなかった。その王政は、共和派が国王を脅し、フランスから追放することがないように望んでいた。共和派は、ひとたび国王がいなくなると、自分たちの成功を祝福し、自分たちには統治能力があると信じて疑がなかった。フランスは、共和派の台頭をうけ入れた。というのも、共和派の出番は時をえており、彼らは新鮮で希望に満ち、引きつけるものをもっていたからである。しかも共和派は、当時、行動には規律があり、だれにも脅威を与えなかった。

二月革命後の最初の選挙の時、フランス国民は何百万票も投じて共和政に賛成した。国民には選挙権が与えられ、彼らは時にあった人々を選出した。フランスは、ギゾーとオルレアン家の国王の支配を脱した直後の数カ月間、政治的には他の時期には味えなかったような爽快な気分を満喫した。しかし、フランスは共和政を歓迎したために、かえって共和的ではなくなってしまうた。共和派はためされていたのである。そして、いくつかの誤ちを共和派が犯すと、フランスが同派に寄せていた善意は、たちまちなくなってしまうた。共和派は、その敵ですら予想していなかった速さで、次々と誤ちを犯した。その結果、六月暴動以後、反動がゆっくりかつ着実に進行していったのである。

(2) 共和派の飛躍

人々は、見ようと思えば、じつに多くのものを見ることができた。だが容易に見ることができなかつたのが、共和派の発展であった。失敗はしたが、二つの暴力行為、すなわち、五月十五日のブランキ主義派の議会侵入と六月暴動

は、フランス中を震撼させた。しかし、その二つの暴力行動は、共和派の運動の革命的側面を破壊してしまつたか、あるいは少なくとも停止させてしまつたのである。三年半の間、共和派は防戦に回つた。そしてその間、民衆の中に味方を作ろうと努力し、自らと共和政を守つた。

三年半の間、共和派は他のフランス人がやらないような宣伝を行った。彼らは、保守的な王党派である秩序党のように富裕階級や特権階級をあてにすることはできなかった。また、ルイ・ナポレオンのように、過去の栄光ある名称とか、警察や軍隊に頼ることもできなかった。共和派が唯一頼みにできたのは民衆であつた。だが、そのためには、まず民衆を自分たちの主張に賛同させなくてはならなかつた。

保守派は当然のことながら、民衆を無視した。むしろ民衆には不信感をもっていた。すなわち、保守派は、民主政治を信じなかつたのである。それというのも、保守派は有権者が制限されている限り安泰だつたからである。

ルイ・ナポレオンは、民衆を無視しなかつた。彼は民衆を信用しないというよりも、むしろ侮っていた。彼は民衆に諂ひ、約束をし、その偏り易い傾向がどちらに傾くかつねに注意した。彼は人気が高まることを望んでいた。しかし、民衆に誠実であつたわけではなく、彼らを意のままにしようという野心もなかつた。

それに対して共和派は、ひとつの信条をもち、それを何とか民衆にも共有してもらいたいと望んでいた。共和派は熱狂徒であり、使命感に燃える人たちであつた。彼らは、民衆が無関心であつたり、盲目的に従順であつたり、また、慈善行為に消極的であることを嫌い、偉大な信条に積極的に協力してくれるように望んだ。共和派は、自由、平等、友愛を訴えた。皮肉屋は、これらの言葉には実体がないと批判したが、民衆は、その言葉を様々な方法で解釈し、自分たちの必要性や思いを満たしていった。第三共和政の七〇年間のうちに、その言葉のもつ魔力は失われてしまつたが、一八四八年から一八五一年にかけての共和派には、その言葉は、大きな犠牲を払うだけの価値のある希望のメッセージだったのである。というのも、当時共和派は、保守的な議会と、選挙で選ばれ自分で統治していながら、その

共和政を壊してしまおうとする大統領と、長い戦いを続けていたからである。

当時、共和主義というのは、フランスの政治においては、少し異質な存在であった。それは、対立している思想や主義からみると、何か若々しく、大胆で、危険性もあったが希望にもあふれているように思えた。共和主義とは、民衆に対し、政治を公正のために、自分たち自身の利益のために、真剣に考えようという訴えであった。それはまた、民衆の勇氣と知性を要求する、民衆の心や精神への呼びかけでもあったのである。

共和派は、町や多くの田舎の地区で活発に活動を展開した。彼らは行く先々で、それまで無関心であった民衆の政治への関心を高めていった。一八五一年十二月二日当時では、民衆の中で共和派に理解を示す人たちは、ごくわずかでしかなかった。もっとも少ないと言っても、一八四八年以前に共和派を支持していた人たちよりは多かった。十九世紀を通して、良かれ悪しかれ、共和派がフランス国民に対して行った政治教育の責任は、他のすべての党派の責任をあわせたものよりも大きかった。それというのも当然であった。というのは、民衆を信頼していたのは共和派だけであり、共和派だけが、民衆に語りかけることができたからである。第三共和政の門戸が開かれたのは、共和派のこうした何世代にもわたる活動があったからである。ブルボン王朝だろうとボナパルト王朝だろうと、フランスを王制国家にするよりも共和国にする方が、はるかに多くの努力を必要とした。したがって、共和国が最終的に誕生した時、それを何としても長続きさせるべきである、というようになって、われわれはなんで驚く必要があるだろうか。

※本稿は、JOHN PLAMENATZ, *The Revolutionary movement in France 1815-71* (LONGMANS, GREEN AND Co., LONDON・NEW YORK・TORONTO, 1952) の翻訳である。章・節以外の小見出しは訳者がつけた。注も最後までまとめた。

(一)は、「序論・第一章 大革命」、(二)は、「第二章 復古王政」、(三)は、「第三章 七月王政」、(四)は、「第四章 第二共和政」の前半部分(一)とする、(四)は、「第四章 第二共和政」の後半部分(二)とする、(五)は、「第五章 第二帝政」の前半部分(一)とする、(五)は、「第五章 第二帝政」の後半部分(二)とする(六)は、「第六章 パリ・コミューン」。次回は、「第七章 フランス共和国」(七)である。